

校長室より

二松学舎大学附属高等学校
校長 鶴飼教之

「二松から飛翔へ」～一期一会～

校長研修「全国高等学校校長会」に参加して

～未来社会への対応 (AI) ～

全国の高等学校長が一堂に会する「全国高等学校長協会総会」が5月27・28日の2日間、埼玉県の大宮ソニックシティホールで開催され、私も参加してきました。文部科学省の最新の教育施策について理解を深めるとともに、全国の学校の実践事例を共有し、これからの学校づくりについて考える貴重な機会となりました。

現在、私たちを取り巻く社会は大きな転換期を迎えています。人口減少・少子高齢化、グローバル化、多様性と包摂の重視、デジタル化 (Society5.0)、変化の激化と不確実性の高まり、そして人生100年時代。こうした要素が複雑に絡み合いながら、社会の姿そのものを変えつつあります。

例えば、2050年には日本の人口は1億人を下回り、生産年齢人口は現在の約7割から5割程度まで減少すると予測されています。また、2040年には日本に暮らす外国人が総人口の1割を占めるとも言われています。働き方や価値観も大きく変化し、終身雇用を前提とした人生設計は難しくなっていくでしょう。さらに、生成AIの進化は私たちの想像を超えるスピードで進んでいます。知識を蓄積し、瞬時に答えを導き出す能力だけを見れば、東大医学部の入試に合格するなど、すでに人間を上回る場面も少なくありません。しかし、そのような時代だからこそ、人間ならではの力が一層重要になると思います。

多様な価値観に触れながら育まれる想像力や好奇心、相手の気持ちを理解する共感力、状況を総合的に判断する力、そして自ら問いを立てる力。異なるアイデアを結び付け、新しい価値を創造する力は、人間だからこそ発揮できる能力です。また、AIを使いこなすためにも、自分の考えを適切な言葉で表現する力が欠かせません。



学校教育が担う役割も、単に知識を教えることから、こうした「人間ならではの力」を育むことへと、ますます重心が移っていくのだと感じます。生徒たちが変化の激しい未来社会の中で主体的に生き、持続可能な社会の創り手となれるよう、学校としても教育内容や指導方法を絶えずアップデートしていかなければなりません。

今回の総会は、未来を生きる子どもたちのために、学校は何を大切にすべきかを改めて考える機会となりました。同時に、教職員も学び続ける存在であることの大切さを実感した2日間でした。

～教職員校内研修会「生徒 (SOS 対応)」～

中間考査期間中の5月20日、本校スクールカウンセラーの古賀先生を講師に迎え、「SOSの受け止め方—生徒から相談を受けたときの初期対応—」をテーマとした教員研修を実施しました。

学校生活の中では、生徒たちが様々な悩みや不安を抱えることがあります。友人関係や家庭環境、進路への不安、学習面での悩みなど、その内容は一人ひとり異なります。そして、そうした悩みは必ずしも言葉として表れるとは限りません。何気ない表情の変化や行動の変化として現れることも少なくありません。

今回の研修では、生徒から直接相談を受けた場合の対応だけでなく、「どのようなサインに気付くか」「どのような言葉掛けが望ましいか」など、具体的な事例を交えながら学びました。

特に印象的だったのは、「完璧な対応を目指す必要はない」ということです。大切なのは、生徒の声を受け止め、安心して話せる関係をつくり、必要な支援につなげること。一人で抱え込まず、管理職や養護教諭、学年主任、生徒指導担当、スクールカウンセラーなどと連携しながら対応することの重要性を再確認しました。研修では、「迷ったら、まず受け止める」「安全を確認する」「秘密を抱え込まない」「一人で対応しない」という基本姿勢も共有されました。生徒のSOSに気付くためには、日頃からの何気ない会話や挨拶、教室での小さな変化に目を向けることが何より大切です。

学校は学力を育てる場であると同時に、生徒たちが安心して過ごせる居場所でもあります。教職員一人ひとりが学び続けながら、生徒たちの成長を支えられるよう努めてまいります。保護者の皆様とも連携しながら、生徒たちを見守っていききたいと思います。

